

二字漢語動名詞の使用実態に関する報告 —「中納言」を用いて—

A report on how sino-Japanese verbs composed of two Chinese characters are used in contemporary written Japanese

庵 功雄・宮部 真由美

要旨

本稿では、漢語サ変動詞の使役形である「漢語+させる」の頻度を中納言を用いて調べた。その結果、基本語彙と考えられる能力試験 1 級までの二字漢語の大部分において、「させる」は「強制」や「許可・許容」の用法ではなく、「他動詞を作る」ために使われていることがわかった。また、定延（2000）で指摘されている「使役余剰」が実際の言語使用においてもかなり安定的に見られる現象であることもわかった。本稿の結果は、最近の日本語教育文法の主張を定量的に裏付けるものであるとともに、シラバス策定における、大規模コーパスの有用性を示すものでもある。

キーワード：中納言、使役、「させる」、使役余剰、日本語教育文法

1. はじめに

近年の日本語教育文法の議論の 1 つの流れに「初級文法シラバスの見直し」ということがある（cf. 山内 2009、庵 2009a、2009b、2012、2013、森 2011、2012）。その議論の中で、特に使役について盛んに論じられており（cf. 森 2012a、岩田 2012、庵 2012、2013）、使役を初級で導入する必要はないという結論を得ている。本稿では、こうした主張を定量的側面から裏付けるべく行った調査の結果を報告する。本稿の調査結果は、日本語教育における使役、および、漢語動名詞¹の扱いに関して重要な含意を持つものである。

2. 先行研究

本稿は、漢語サ変動詞における使役形、すなわち、「漢語+させる」の使用頻度を、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）の検索ツールである「中納言」を使って検索した結果を報告するものである。

本稿に関連が深い先行研究には次のものがある。

まず、BCCWJ を用いて使役の定量的側面を考察したものに森（2012a）がある。同論文は、BCCWJ2009 年度モニター版のコアデータ²を用いて、使役の使用実態を調べたも

¹ 動名詞とは、「する」を付けてサ変動詞として使うことができる語のことである（cf. 影山 1993、小林 2004、張 2013）。

² コアデータとは、「UniDic1.3.12 による形態素解析結果に人手による修正を施して精度 99% 以上としたデータ」（森 2012a）である。

のである。その結果によれば、使役の使用頻度は他の文法形式と比べて相当程度低く、かつ、使われている使役の用法の大多数は「強制」「許可・許容」ではない「その他」の用法であることという。本稿では、この森(2012a)の調査結果を受け、調査範囲を(同論文の調査時以降に公開された)「中納言」を用いた BCCWJ 全体とし、かつ、調査対象を和語を除いた漢語サ変動詞のみに限定することによって、森(2012a)の調査結果の妥当性を検証する。

一方、漢語サ変動詞の使役形に関しては、定延(2000)において「使役余剰」と呼ばれている現象がある。使役余剰とは、本来なら「漢語+する」で十分な場面で「漢語+させる」が使われることを言う。例えば、(1)と(2)は同じ新聞の同じ年の記事で、ともに「ため」節の中の用例であるが、(1)では「漢語(実現)+する」が使われているのに対し、(2)では「漢語(実現)+させる」が使われている³。

- (1) 「個人への負荷が限界を超えた時社会の反発が高まる」とヤーギン氏は言う。さまざまな集団が個別の利益を実現するため「反グローバリゼーション」を掲げ、国際交渉に直接参加を求めたのもその表れだ。(毎日新聞朝刊 2000.1.4)
- (2) 小渕恵三首相は(中略)衆院の冒頭解散は行わず、定数削減後に実施する考えを強調した。また、自由党との合流問題を実現させるため、自ら自民党内の説得に当たる考えを示した。(毎日新聞朝刊 2000.1.1)

(1)が文法的であるので、項の数は満たされており、(2)の「させる」が使役であるとする、「させ」の付加によって増えるはずの項(使役文の動作主に相当する)が余ってしまう。これが「使役余剰」ということである。これに関する最新の研究に森(2012b)がある。

また、「漢語+させる」の用法の1つに「漢語+する」の他動詞(相当)形ということがある。例えば、(3)に対応する他動詞(相当)用法として(4a)は不適格で(4b)を使う必要があるが、これは、(4b)が(3)に対応する他動詞(相当)用法であることを示している⁴。

³ 二字漢語動名詞の最新かつ最も包括的な研究である張(2013)によると、読売新聞1年分に「実現」の自動詞用法は1102例、他動詞用法は823例出現する。こうした典型的な自他両用動詞においてすら、「漢語+させる」の例が見られることは注目に値する。

⁴ (4) b が使役ではなく、他動詞(相当)であるのは、次の2点からもわかる。第一は、この場合のヲ格名詞句は無情物であり、典型的な使役文の動作主は有情物でなければならないという制約に反しているということである。第二は、(4) a、b で項の増加がないことである。実際、「発展する」を「使役」として使う場合、(4) b に対応する表現は使えない。

- *国王は首相に A 国の経済を発展させた。

この文で意図されている意味を使役で表すには、次のように二重使役を使うしかない(ただし、実際にはこうした二重使役は避けられるので、ここで意図されている意味を表そうとすると、「国王は首相に A 国の経済を発展させるように指示した。」等の間接的な表現を使わざるを得ない)。

- 国王は首相に A 国の経済を発展させさせた。

こうした非情物を目的語に取る使役文については前田(2003)に興味深い指摘がある。

- (3) A国の経済が発展した。
(4) a. *彼はA国の経済を発展した。
b. 彼はA国の経済を発展させた。

こうした漢語動名詞の自他については小林(2004)が詳しい。また、これに関する最新の優れた研究に張(2013)がある。

3. 調査の概要

以上の議論を受けて、本稿では「中納言」を用いた調査を行った。調査の方法としては、まず、旧日本語能力試験出題基準(国際交流基金1994)で1級までのレベルに含まれている全ての二字漢語を「茶まめ」(UniDic 1.3.12, Mecab 0.98)を用いて形態素解析し、その中で品詞情報が「名詞-普通名詞-サ変可能」または「名詞-普通名詞-サ変形状詞可能」である語を全て考察対象とした。その結果、考察対象となった語は1198語であった。

次に、この1198語全てについて、「漢語+する⁵⁾」「漢語+させる⁶⁾」の用例数を検索した⁷⁾。検索時の設定は、次の通りである(検索語が「実現」の場合を例とする)。

「漢語+する」は、レンマとしての「漢語+する」の用例数から、「漢語+させる」と「漢語+される」の用例数を引けばいいので、次のように検索した(「実現」を例とする)。

- (5) 「漢語+する」の場合
「する」を含むもの
前方共起1 「語彙素=を」AND「品詞=助詞-格助詞」 キー「語彙素=実現」
後方共起1 「語彙素=為る」
「させる」を含むもの
前方共起1 「語彙素=を」AND「品詞=助詞-格助詞」 キー「語彙素=実現」
後方共起1 「語彙素=為る」AND「書字形実現形=さ」
後方共起2 「語彙素=せる」AND「品詞=助動詞」
「される」を含むもの
前方共起1 「語彙素=を」AND「品詞=助詞-格助詞」 キー「語彙素=実現」
後方共起1 「語彙素=為る」AND「書字形実現形=さ」
後方共起2 「語彙素=れる」AND「品詞=助動詞」

⁵⁾ この場合の「する」はレンマであり、実際の出現形としては「する、した、すれば、せよ」など「する」の全てのバリエーションを含む。「中納言」ではレンマは「語彙素」と呼ばれる。

⁶⁾ 「させる」の場合も「する」と同様、「させる」の全てのバリエーションが含まれる。

⁷⁾ なお、本稿では、いずれの場合も、「を」が「漢語+する/させる」の直前に来る場合のみを検索対象とした。本来なら、「を」と「漢語+する/させる」の間に要素が介在する場合も考察対象とすべきであるが、時間の関係でそれはできなかった。今後の課題としたい。

一方、「させる」の場合は次のように設定して検索を行った。

(6) 「漢語+させる」の場合

前方共起1 「語彙素=を」AND「品詞=助詞-格助詞」 キー「語彙素=実現」

後方共起1 「語彙素=為る」AND「書字形実現形=さ」

後方共起2 「語彙素=せる」AND「品詞=助動詞」

4. 調査の結果

本節では調査の結果について述べる。

4.1 「させる」の頻度

まず、「漢語+させる」(以下、「させる」)の出現頻度(以下、「頻度」)を見るために、「させる」の頻度順の上位100位までを頻度順に一覧にすると次の(図1)のようになる。

(表1)を見ると、「させる」の頻度は同じでも「漢語+する」(以下、「する」)の頻度には大きな差が見られることがわかる。

二字漢語動名詞の使用実態に関する報告
 —「中納言」を用いて—

表1 「VNさせる」と「VNする」の出現頻度
 (「VNさせる」の出現頻度順上位100位まで)

語彙素	「させる」 順位	「させる」 率順位	VNする (全体)	VNする (狭義)	VNさせる	VNされる	語彙素	「させる」 順位	「させる」 率順位	VNする (全体)	VNする (狭義)	VNさせる	VNされる
向上	1	27	638	72	566	0	崩壊	51	22	63	4	58	1
完成	2	48	598	201	393	4	認識	52	89	1036	972	57	7
発生	3	44	512	155	356	1	実感	53	77	510	452	55	3
成功	4	3	348	4	344	0	出現	54	17	56	2	54	0
発展	5	4	346	3	342	1	再生	55	70	286	233	53	0
低下	6	5	341	5	336	0	緊張	56	25	57	5	52	0
変化	7	8	316	7	309	0	循環	56	54	93	41	52	0
増加	8	41	379	83	296	0	確立	58	46	73	19	50	4
充実	8	51	507	210	296	1	先行	58	91	1276	1220	50	6
満足	10	42	369	86	283	0	逆転	60	50	83	32	49	2
成立	11	23	278	23	255	0	結合	61	26	53	5	48	0
実現	12	78	2520	2262	252	6	沸騰	61	63	160	112	48	0
減少	13	33	289	40	249	0	分散	63	57	105	58	47	0
優先	14	65	842	593	244	5	麻痺	64	21	49	3	46	0
連想	15	55	448	203	237	8	興奮	65	28	51	6	45	0
納得	16	38	286	57	228	1	一致	66	24	48	4	44	0
回転	17	32	236	31	205	0	軽減	66	53	78	34	44	0
増大	18	39	243	50	193	0	独立	66	81	491	443	44	4
復活	19	37	235	45	188	2	継続	69	9	43	1	42	0
集中	20	61	492	316	174	2	参加	69	88	748	703	42	3
発足	21	29	190	23	167	0	失望	71	10	42	1	41	0
反映	22	79	1631	1472	158	1	進行	71	47	60	19	41	0
回復	23	67	726	566	156	4	増進	73	11	41	1	40	0
促進	24	85	2307	2159	145	3	縮小	73	31	46	6	40	0
上昇	25	30	156	20	136	0	動揺	73	64	136	96	40	0
混乱	26	6	116	2	114	0	担当	73	69	212	172	40	0
拡大	27	82	1254	1141	112	1	対応	73	96	1588	1528	40	20
登場	28	1	110	0	110	0	前進	78	35	48	9	39	0
爆発	29	2	110	1	109	0	負担	78	86	627	587	39	1
発達	30	18	114	6	108	0	展開	78	97	1855	1800	39	16
理解	31	95	3070	2969	93	8	燃焼	81	13	39	1	38	0
成長	32	7	94	2	92	0	蒸発	81	14	39	1	38	0
一変	33	36	111	21	90	0	進化	81	49	63	25	38	0
乾燥	34	40	105	22	83	0	自覚	84	43	52	15	37	0
両立	35	45	119	36	82	1	調和	84	83	512	470	37	5
徹底	35	68	430	348	82	0	体験	86	60	101	65	36	0
誕生	37	12	80	2	78	0	対比	86	90	782	740	36	6
加速	37	56	165	86	78	1	形成	88	98	2046	2007	35	4
持続	37	59	194	116	78	0	完了	89	76	310	275	34	1
停止	40	71	444	351	77	16	散歩	90	15	34	1	33	0
予感	41	58	168	93	74	1	痛感	90	72	246	213	33	0
検査	42	62	229	152	71	6	入院	90	73	267	232	33	2
存続	43	34	83	14	69	0	見学	93	16	33	1	32	0
確認	44	99	4520	4431	68	21	中断	93	20	34	2	32	0
通過	45	84	953	883	67	3	確定	93	74	263	219	32	12
発揮	45	94	2061	1986	67	8	進展	93	75	269	237	32	0
感動	47	19	69	4	65	0	死亡	93	80	344	308	32	4
普及	47	52	112	46	65	1	消耗	98	66	120	89	31	0
提出	49	93	1709	1624	62	23	改善	98	92	841	810	31	0
想像	50	87	1057	989	61	7	後退	100	100	6577	6534	30	13

このことを捉えるために、「させる」と「する」の合計に占める「させる」の割合を求め、これを「「させる」率」と呼ぶことにする。「「させる」率」が高いものほど、使役/他動詞的な用法において「させる」が使われる率が高いことになる。

次に、「「させる」率」に着目して(表1)を並び替えると、次の(表2)が得られる。

表2 「させる」率にもとづく一覧

語彙素	「させる」 率順位	「させる」 順位	VNする (全体)	VNする (狭義)	VNさせる	「させる」 率	語彙素	「させる」 率順位	「させる」 順位	VNする (全体)	VNする (狭義)	VNさせる	「させる」 率
登場	1	28	110	0	110	100.0	充実	51	8	507	210	296	58.4
爆発	2	29	110	1	109	99.1	普及	52	47	112	46	65	58.0
成功	3	4	348	4	344	98.9	軽減	53	66	78	34	44	56.4
発展	4	5	346	3	342	98.8	循環	54	56	93	41	52	55.9
低下	5	6	341	5	336	98.5	連想	55	15	448	203	237	52.9
混乱	6	26	116	2	114	98.3	加速	56	37	165	86	78	47.3
成長	7	32	94	2	92	97.9	分散	57	63	105	58	47	44.8
変化	8	7	316	7	309	97.8	予感	58	41	168	93	74	44.0
継続	9	69	43	1	42	97.7	持続	59	37	194	116	78	40.2
失望	10	71	42	1	41	97.6	体験	60	86	101	65	36	35.6
増進	10	73	41	1	40	97.6	集中	61	20	492	316	174	35.4
誕生	12	37	80	2	78	97.5	検査	62	42	229	152	71	31.0
燃焼	13	81	39	1	38	97.4	沸騰	63	61	160	112	48	30.0
蒸発	13	81	39	1	38	97.4	動揺	64	73	136	96	40	29.4
散歩	15	90	34	1	33	97.1	優先	65	14	842	593	244	29.0
見学	16	93	33	1	32	97.0	消耗	66	98	120	89	31	25.8
出現	17	54	56	2	54	96.4	回復	67	23	726	566	156	21.5
発達	18	30	114	6	108	94.7	徹底	68	35	430	348	82	19.1
感動	19	47	69	4	65	94.2	担当	69	73	212	172	40	18.9
中断	20	93	34	2	32	94.1	再生	70	55	286	233	53	18.5
麻痺	21	64	49	3	46	93.9	停止	71	40	444	351	77	17.3
崩壊	22	51	63	4	58	92.1	痛感	72	90	246	213	33	13.4
成立	23	11	278	23	255	91.7	入院	73	90	267	232	33	12.4
一致	23	66	48	4	44	91.7	確定	74	93	263	219	32	12.2
緊張	25	56	57	5	52	91.2	進展	75	93	269	237	32	11.9
結合	26	61	53	5	48	90.6	完了	76	89	310	275	34	11.0
向上	27	1	638	72	566	88.7	実感	77	53	510	452	55	10.8
興奮	28	65	51	6	45	88.2	実現	78	12	2520	2262	252	10.0
発足	29	21	190	23	167	87.9	反映	79	22	1631	1472	158	9.7
上昇	30	25	156	20	136	87.2	死亡	80	93	344	308	32	9.3
縮小	31	73	46	6	40	87.0	独立	81	66	491	443	44	9.0
回転	32	17	236	31	205	86.9	拡大	82	27	1254	1141	112	8.9
減少	33	13	289	40	249	86.2	調和	83	84	512	470	37	7.2
存続	34	43	83	14	69	83.1	通過	84	45	953	883	67	7.0
前進	35	78	48	9	39	81.3	促進	85	24	2307	2159	145	6.3
一変	36	33	111	21	90	81.1	負担	86	78	627	587	39	6.2
復活	37	19	235	45	188	80.0	想像	87	50	1057	989	61	5.8
納得	38	16	286	57	228	79.7	参加	88	69	748	703	42	5.6
増大	39	18	243	50	193	79.4	認識	89	52	1036	972	57	5.5
乾燥	40	34	105	22	83	79.0	対比	90	86	782	740	36	4.6
増加	41	8	379	83	296	78.1	先行	91	58	1276	1220	50	3.9
満足	42	10	369	86	283	76.7	改善	92	98	841	810	31	3.7
自覚	43	84	52	15	37	71.2	提出	93	49	1709	1624	62	3.6
発生	44	3	512	155	356	69.5	発揮	94	45	2061	1986	67	3.3
両立	45	35	119	36	82	68.9	理解	95	31	3070	2969	93	3.0
確立	46	58	73	19	50	68.5	対応	96	73	1588	1528	40	2.5
進行	47	71	60	19	41	68.3	展開	97	78	1855	1800	39	2.1
完成	48	2	598	201	393	65.7	形成	98	88	2046	2007	35	1.7
進化	49	81	63	25	38	60.3	確認	99	44	4520	4431	68	1.5
逆転	50	60	83	32	49	59.0	後退	100	100	6577	6534	30	0.5

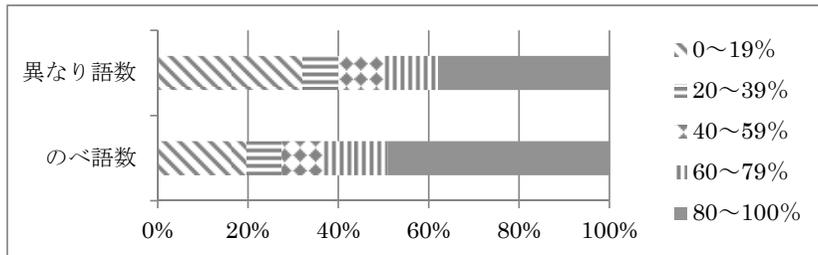
この(表2)において、順位が上位の語は、ヲ格を取るときに、「する」ではなく「させる」を取る傾向が強く、順位が下位の語は、「する」を取る傾向が強いと言える。

この点を明らかにするために、「させる」率」ごとに、それに属す語の割合を表すと、次の(表3)(図1)のようになる。

表3 「させる」率と異なり語数、延べ語数

「させる」率	0～19%	20～39%	40～59%	60～79%	80～100%
異なり語数	32	8	10	12	38
のべ語数	2068	800	1020	2080	4654

図1 「「させる」率」と異なり語数、述べ語数⁸



さて、(表1)(表2)を統合し、「させる」で使われやすい語順に並び替えるために、「させる」の頻度による順位と、「させる」率による順位を関連づけ、それによる順位を考える。この場合、2つの順位の間には何らかの重み付けをする必要があるが、ここでは、「させる」の順位に0.8、「させる」率の順位に0.2を与えて「総合順位」を求めた。すなわち、次のようになる⁹。

$$(7) \text{ 総合順位} = \text{「させる」順位} \times 0.8 + \text{「させる」率} \times 0.2$$

次に、この「総合順位」の順に並び替えると、次ページの(表4)になる。

この(表4)で上位に現れる語が「させる」で表される割合が最も高いものと考えることができる。

⁸ カイ二乗検定の結果は、 $\chi^2(4) = 11.67$ 、 $p < .05$ であり、残差分析の結果、0～19%の異なり語数は有意に少なく、0～19%のべ語数は有意に多かった(いずれも $p < .01$)。それ以外は全て有意差がなかった。

⁹ このように重み付けを行っても、依然として、このように順位という順序尺度に加減乗除を行うことが統計的には意味がないことは明らかである。しかし、「させる」の頻度を表す「させる」順位の方に大きな重み付けを行うことによって、参考となる指標にはなるのではないかと考えられる。ちなみに、「させる」順位と「させる」率順位の間のカイ二乗係数は.287であった。

表4 「総合順位」にもとづく一覧

語彙素	総合 順位	「させる」 順位	「させる」 率順位	語彙素	総合 順位	「させる」 順位	「させる」 率順位	語彙素	総合 順位	「させる」 順位	「させる」 率順位
成功	3.8	4	3	拡大	38.0	27	82	軽減	63.4	66	53
発展	4.8	5	4	加速	40.8	37	56	先行	64.6	58	91
低下	5.8	6	5	存続	41.2	43	34	縮小	64.6	73	31
向上	6.2	1	27	持続	41.4	37	59	進出	66.2	71	47
変化	7.2	7	8	感動	41.4	47	19	燃焼	67.4	81	13
完成	11.2	2	48	徹底	41.6	35	68	蒸発	67.6	81	14
発生	11.2	3	44	理解	43.8	31	95	独立	69.0	66	81
成立	13.4	11	23	予感	44.4	41	58	前進	69.4	78	35
増加	14.6	8	41	崩壊	45.2	51	22	動揺	71.2	73	64
満足	16.4	10	42	検査	46.0	42	62	担当	72.2	73	69
充実	16.6	8	51	停止	46.2	40	71	参加	72.8	69	88
減少	17.0	13	33	出現	46.6	54	17	進化	74.6	81	49
回転	20.0	17	32	普及	48.0	47	52	散歩	75.0	90	15
納得	20.4	16	38	緊張	49.8	56	25	自覚	75.8	84	43
混乱	22.0	26	6	通過	52.8	45	84	対応	77.6	73	96
増大	22.2	18	39	結合	54.0	61	26	見学	77.6	93	16
復活	22.6	19	37	發揮	54.8	45	94	中断	78.4	93	20
登壇	22.6	21	29	確認	55.0	44	99	負担	79.6	78	86
登場	22.6	28	1	麻痺	55.4	64	21	体験	80.8	86	60
連想	23.0	15	55	循環	55.6	56	54	展開	81.8	78	97
爆発	23.6	29	2	確立	55.6	58	46	調和	83.8	84	83
優先	24.2	14	65	継続	57.0	69	9	完了	86.4	89	76
実現	25.2	12	78	想像	57.4	50	87	痛感	86.4	90	72
上昇	26.0	25	30	興奮	57.6	65	28	入院	86.6	90	73
成長	27.0	32	7	一致	57.6	66	24	対比	86.8	86	90
発達	27.6	30	18	提出	57.8	49	93	確定	89.2	93	74
集中	28.2	20	61	実感	57.8	53	77	進展	89.4	93	75
回復	31.8	23	67	再生	58.0	55	70	形成	90.0	88	98
誕生	32.0	37	12	逆転	58.0	60	50	死亡	90.4	93	80
反映	33.4	22	79	失望	58.8	71	10	消耗	91.6	98	66
一変	33.6	33	36	認識	59.4	52	89	改善	96.8	98	92
乾燥	35.2	34	40	増進	60.6	73	11	後退	100.0	100	100
促進	36.2	24	85	沸騰	61.4	61	63				
両立	37.0	35	45	分散	61.8	63	57				

5. 結果とその含意

本節では、今回の調査の結果が持つ含意を、理論的なものと、日本語教育に関するものに分けて述べる。

5.1 理論的な含意

今回の調査の結果が持つ理論的な含意には、「使役」に関するものと、「使役余剰」に関するものがある。

まず、「使役」についてだが、次の(表5)を見てみよう。これは、「させる」順位と「平均順位」のそれぞれ上位30語を挙げたものであり、*をつけたものは、ヲ格に有情物を取り得るものである(「取り得る」だけであって必ず取るということではない)。

表5 「させる」順位と総合順位

語彙素	総合順位	「させる」順位	語彙素	総合順位	「させる」順位
成功	3.8	4	増大	22.2	18
発展	4.8	5	復活	22.6	19
低下	5.8	6	発足	22.6	21
向上	6.2	1	登場*	22.6	28
変化	7.2	7	連想	23.0	15
完成	11.2	2	爆発	23.6	29
発生	11.2	3	優先	24.2	14
成立	13.4	11	実現	25.2	12
増加	14.6	8	上昇	26.0	25
満足*	16.4	10	成長*	27.0	32
充実	16.6	8	発達	27.6	30
減少	17.0	13	集中	28.2	20
回転	20.0	17	回復	31.8	23
納得*	20.4	16	誕生*	32.0	37
混乱	22.0	26	反映	33.4	22

これを見ると、特に「させる」の頻度が多いものの大部分は「もの」や「こと」をヲ格に取るものであり、実質的には他動詞であることがわかる。

次に、「使役余剰」に関するものだが、これについて見るために、(表4)を少し変形すると次のようになる。

表4-2 「させる」率と異なり語数、延べ語数

	0~19%	20~79%	80~100%
異なり語数	32	30	38
延べ語数	2068	3900	4654

これら全ての場合において、「される」が使われると、「使役余剰」の解釈が生じる可能性がある。しかし、「させる」率が高い場合は、「する」の使用が例外的であるため、使役余剰はあり得るとしても、それほど安定的な用法とは言いがたい。逆に、「させる」率が低い場合は、「させる」自体がほとんど使われないため、やはり使役余剰は生じにくい。しかし、(表4-2)の中頻度のものはそのどちらでもないもので、使役余剰が「安定的に」生じていると考えられる。

このように見ていくと、定延(2000)で指摘されている「使役余剰」は、日本語の漢語のボイスを考える上で、重要な位置を占める現象であることがわかる¹⁰。

5.2 日本語教育への含意

本稿の結果の日本語教育における含意は、第一に、漢語に関しても、現在の日本語教育で使役に関して中心的に教えられている「強制」や「許可・許容」の用法は書きことばにおいてはほとんどなく、用法の大部分は「他動詞を作るための使役」であるという事実が改めて確認されたということである¹¹。そうである以上、使役を教える際には、「強制」や「許可・許容」よりも「他動詞を作る使役」を優先的に教えるべきであると言える(ただし、重要度から考えて、教えるとしても、それは初級ではなく中級以降ということになる)。

6. まとめ

本稿では、使役を初級で教える必要はない(教えてはいけない)とする、最近の日本語教育文法の主張を定量的に検証するために行った調査の結果を報告した。

その結果、「漢語+させる」の主な用法は「使役」ではなく、「他動詞を作る」ということであることが確認された。また、定延(2000)の指摘する「使役余剰」は(少なくとも

¹⁰ 本稿の草稿において、筆者(庵)は定延(2000)における「使役余剰」を「周辺の」な現象として記述し、「周辺の」ということが頻度の問題と結びついていると解釈できる記述を行っていた。しかし、これは明らかにミスリーディングであったので、その部分の記述を本稿から削除した。読者諸賢には付記するまでもないこととは思われるが、念のため確認しておく、定延(2000)における『周辺の』ということは、既存の文法理論の枠組みから見た場合に『周辺の』ということになるということにすぎず、その現象自体が、自然言語の「言語レベル」の問題として、普通の(辞書的)意味で「周辺の」であるとは限らない。定延(2000)において、「周辺の」という語が全て『』で囲まれているのはこのためである(一方、この文の1文上の「周辺の」は日常言語で言う使い方なので、「」で囲んでいる)。「周辺の」という語をこのように理解することこそが定延(2000)の真価を理解する上での根幹であるので、敢えて付記する次第である(cf. 定延(2000: 7-10))。この点については、定延利之氏(個人談話)のご指摘に多くを学ぶことができた。記して心より感謝申し上げます。

¹¹ この事実は森(2012a)において示唆されている。なお、書きことばにおいて、「強制」や「許可・許容」が少ないのは、書きことばが特定の聞き手(読み手)に向けられて書かれるものではないということによっても考えられる。今後は、話しことばにおいても同様な調査を行い、今回の調査結果が話しことばにおいても妥当であるかを確認する必要がある。

書きことばにおいては) かなり広範囲に見られる現象であることもわかった¹²。

こうした言語事実が存在することから、使役に関しては次のように考えることが必要になると思われる。

- (7) a. 使役は漢語に関しても、初級で教える必要はない¹³。
- b. 漢語に関して使役を教える際は、「強制」や「許可・許容」としてよりも、「他動詞を作るマーカー」として教える。
- c. 「使役余剰」は書きことばにおいてはかなりの頻度で見られる現象であることを自覚し、学習者に対して注意を促す心の構えをしておく。

本稿で行ったような考察は、BCCWJ のような大規模コーパスができて初めて可能になったものであり、日本語教育のシラバスを考える上で非常に重要なものであると言える。今後もこうした流れの研究を行い、シラバスの作成をできる限り「データに基づいた」ものにしていく必要がある。

参考文献

- 庵 功雄 (2009a) 「地域日本語教育と日本語教育文法：「やさしい日本語」という観点から」『人文・自然研究』3、pp.126-141
- 庵 功雄 (2009b) 「推量の「でしょう」に関する一考察—日本語教育文法の視点から—」『日本語教育』142、pp.58-68
- 庵 功雄 (2010) 「中国話者の漢語サ変動詞の習得に関わる一要因—非対格自動詞の場合を中心に」『日本語教育』146、pp.174-181
- 庵 功雄 (2012) 「文法シラバス改訂のための一試案—ボイスの場合—」『日本語／日本語教育研究』3、pp.39-55、日本語／日本語教育研究会
- 庵 功雄 (2013) 「「使役(態)」に言及せずに「使役表現」を教えるには」『日本語／日本語教育研究』4、pp.39-55、日本語／日本語教育研究会

¹² 本稿では「使役余剰」という語を用いてきたが、これは(2)のような文における「させ」の存在を「余剰」、すなわち何らかの意味で「逸脱」したものと考える言語観によるものである。しかし、定延 (2000 : ch.4) の議論に従うなら、すなわち、こうした場合の「させ」の存在を、通常の使用におけるような「ビリヤードモデル」ではなく、定延 (2000) の言う「カビ生えモデル」に従って解釈するならば、これは「余剰」ではないことになる。この点についての筆者 (庵) の見解はとりあえず保留しておくが、筆者が別に調査している漢語サ変動詞の非対格自動詞の受身の習得の問題 (cf. 庵 (2010)、庵ほか (2012)) など合わせて考えると、定延 (2000) の指摘が正鵠を射ていると考えるべきではないかという気がしている。

¹³ 使役を初級で教える必要がないとする根拠は頻度の問題だけではない。それよりも、より本質的なのは、使役形 (授受表現などをとみなさない使役形 (庵 (2012) で言う「裸の」使役)) を述語とする文の主語 (使役主) の位置に初級の学習者が立つことはまずなく、「私」を主語にした文を初級の学習者が産出すると、学習者が意図せざる不利益を被る可能性が高いという事実による。この点については、庵 (2012)、高橋・白川 (2006) を参照されたい。

- 庵 功雄・高 恩淑・李 承赫・森 篤嗣(2012)「韓国語母語話者による日本語漢語サ変動詞の習得における母語転移に関する一考察」『言語科学会第14回年次国際大会予稿集』pp.121-124
- 岩田一成(2012)「初級教材における使役の「偏り」と使用実態」『日本語／日本語教育研究』3、pp.21-37、日本語／日本語教育研究会
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 国際教育基金(1994)『日本語能力試験出題基準(改訂版)』凡人社
- 小林英樹(2004)『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 定延利之(2000)『認知言語論』大修館書店
- 高橋恵利子・白川博之(2006)「初級レベルにおける使役構文の扱いについて」『広島大学日本語教育研究』16、pp.25-31、広島大学
- 張 志剛(2013)「現代日本語の二字漢語動詞の自他」2012年度一橋大学言語社会研究科博士学位取得論文
- 前田直子(2003)「10使役 コロンブスの卵一卵を立たせる」庵 功雄・日高水穂・前田直子・大和しげみ・山田敏弘『やさしい日本語のしくみ』くろしお出版
- 森 篤嗣(2011)「着点を表す助詞「に」と「へ」における日本語母語話者の言語使用について」森 篤嗣・庵 功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』pp.319-341、ひつじ書房
- 森 篤嗣(2012a)「使役における体系と現実の言語使用—日本語教育文法の視点から—」『日本語文法』12(1)、pp.3-19、日本語文法学会
- 森 篤嗣(2012b)「漢語サ変動詞におけるスルーサセルの置換について」『第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』
- 山内博之(2009)『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房

使用したツール

Js-STAR2012 (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/>)

UniDic 1.3.12、Mecab 0.98

付記：本稿は、中国語話者のための日本語教育研究会第24回大会(於：東京学芸大学2012.12.22)において行った口頭発表(庵功雄、宮部真由美、趙楠、林篠の共同発表)の内容に加筆修正したものである。なお、本稿は平成22年度～25年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「中国国内における日本語学習者の縦断的中間言語コーパスの構築と動詞の習得過程の解明」(研究代表者：杉村泰)、および、平成22年度～25年度科学研究費補助金(基礎研究(A))「やさしい日本語を用いたユニバーサルコミュニケーション社会実現のための総合的研究」(研究代表者：庵功雄)の研究成果の一部である。

(いおり いさお 国際教育センター准教授、みやべ まゆみ 言語社会研究科博士課程)